

「人材開発論」の授業の開発構造に関する一考察

——「内観法」の治療構造を参照枠として——

加 藤 雄 士

要 旨

本稿は、自己の人材開発を目的とする大学あるいは大学院の授業の機序を、精神療法の「治療構造」を参照枠にして考察した。具体的には、筆者が会計大学院で担当する人材開発論の授業の構造を内枠的構造と外枠的構造に分けて、類似した機序をもつ内観法と比較しながら考察した。外枠的構造は内枠的構造を助けるための方便といえるが、本授業では、内枠的構造と位置づけられるフラクタル心理学の2つの手法を繰り返すことで人材開発の効果があがることを示唆した。また、その実践には抵抗を乗り越えて自責的に思考する内省が必要となり、外枠的構造がその抵抗を乗り越えるためのサポートをしている可能性があることを示唆した。

I はじめに

本稿は、自己の人材開発を目的とする大学あるいは大学院の授業（「人材開発論」の授業）の機序を考察する。精神療法では、各種精神療法の具体的なスキルに関連する決まりごとや治療の組み立てを、一般に『治療構造』と呼ぶ。その治療構造（特に内観法の治療構造）を参照枠として、人材開発論の授業の機序を開発構造（あえてここでは「治療構造」と呼ばず、「開発構造」と呼ぶ）という観点から考察する。外枠的構造と内枠的構造に分けて考察する。

II 人材開発論に関する先行研究とリサーチ・クエスチョン

筆者は、現在に至るまで10年以上にわたって会計大学院で人材開発論の授業を担当してきた。この授業の到達目標は、自己の開発を実際に体験しながら人材開発の本質を習得することである。2017年度からはその軸となる手法としてフラクタル心理学を採用している（この2017年度以降の人材開発論の授業のことを、本稿では「人材開発論」と呼ぶ）。具体的には、7回の授業（1回3時間）のうち5回目くらいまでは、過去の受講生の人材開発